Dysplastic nevus 18

Dysplastic nevus

日野 治子*¹ 松岡 芳隆*¹ 西脇 宗一*²
北島 拓弥*³ 漆畑 修*²

Summary

当院 22 年間で切除した母斑ないし小色素斑 438 個を臨床像と組織像で検討した結果、Elder らおよび NIH の設けた定義に相当する dysplastic nevus は 4 個あった。これらの組織所見では、表皮真皮境界部に melanocyte の胞巣形成が顕著であった。悪性黒色腫の前駆症状といわれる dysplastic nevus であるが、これを臨床形態のみで診断がつくか試みたが、困難であった。

緒 言

われわれの日常診療中、色調の濃淡があり、黒色調が強く、周囲にいわゆる浸み出しさえ伴う母斑にしばしば遭遇し、悪性黒色腫との鑑別を必要とすることがある。しかも、生検をすると、その組織像では、顕著な境界部活性 (junctional activity) を呈し、母斑細胞も紡錘形のもがみられ、ますます診断が困難となる。

最近、dysplastic nevus の概念がとりいれられ、組織および臨床に関して種々の報告がされている。通常、dysplastic nevus は、Dysplastic nevus syndrome または B-K mole syndrome とよばれる家族性皮膚悪性黒色腫にみられるもので、悪性黒色腫の前駆状態の母斑とされている¹⁾²⁾。Dysplastic nevus syndrome および家族

内に同症を認めない sporadic type の症例³⁾⁴⁾にみられるもののみを dysplastic nevus というべきか、ほかに何の皮膚病変をもたない 1 個体にみられた 1 個の母斑でも臨床と組織がそれに相当するならば dysplastic nevus とよんでよいかが問題となる。この点について、Elder らは dysplastic nevus の臨床と組織学的診断基準を提示したが⁵⁾、1983 年、Consensus development conference of precursors to malignant melanoma (National Institutes of Health in U.S.A.) では、家系内に同症をみる場合を dysplastic nevus syndrome とし、家系内発生のない sporadic case にみられるものを dysplastic nevi とした⁶⁾。

われわれは、これらの診断基準⁵⁾⁶⁾をもとに、われわれの経験した症例を検討した。

症 例

1) 統 計

昭和38年6月より、昭和60年5月末までの22年間に380人から、のべ438個の母斑ないし色素斑を切除し、病理標本作製した。これらを臨

*1 Haruko HINO, Yoshitaka MATSUOKA:

関東中央病院皮膚科

*2 Munekazu NISHIWAKI, Osamu URUSHI-

BATA: 東邦大学大橋病院皮膚科

*3 Takuya KITAJIMA: 都立府中病院皮膚科

床的形態と組織像により分類すると表1のごとくとなる。すなわち、真皮母斑172個(39.3%)、複合母斑188個(42.9%)、境界母斑78個(17.8%)、臨床形態としては、隆起したもの278個(63.5%)、扁平ないし浸潤を触れても隆起のないもの158個(36.1%)であった。

複合母斑で、しかも比較的扁平なものは58個(13.2%)であったが、Elderら⁵⁾およびNIH⁶⁾のdysplastic nevusの臨床的定義に相当する母斑が14個(3.2%)みつかった(表2)。この14個のうち3個は1症例でみられたものであるが、他の11個はすべて単発例である。さらに、これら14個に対し、組織学的定義をあわせて検

討すると、4個(0.9%)が、臨床像および組織像ともにいわゆるdysplastic nevusというべき所見を呈していた。

2) 症例

症例2: 23歳, 女

既往歴: 特記すべきことはない。

家族歴: 家系内に悪性黒色腫の発症はなく、色素斑がとくに多い者もない。

図1. 症例2, 左乳房左下方外方の赤褐色斑

表1. 検索した母斑

臨床 組織	隆起型	扁平型		巨母 大色 素性 斑	計
		色素性 母斑	点状集 簇性母 斑		
真皮(内) 母斑	161	3	8		172
複合母斑	115	58	13	2	188
境界母斑	2	74	2		78
計	278	135	23	2	438

表2. 臨床像または組織像がdysplastic nevusの定義に相当する母斑

症例	年齢	性	母斑	部 位	発生時期	大きさ	色 調	組 織 像				
								母斑の分類	mela- nocyte 胞巢形 成	mela- nocyte dys- plasia	真皮乳 頭層の fibro- plasia	真皮炎 症性細 胞浸潤
1	50	女	1	右腹	10年前	爪甲大	黒色	compound	++	—	—	—
2	23	女	2	左乳房左外下	不明	大豆大	赤褐色	compound	+++	+++	+++	+++
3	3	女	3	左膝臑	生下時	鳩卵大	黒色	compound	+++	—	—	—
4	44	男	4	背部	不明	小豆大	黒褐色	compound	+++	+++	++	+
			5	背部	不明	小豆大	褐色	compound	+	—	—	—
			6	背部	不明	小豆大	黒褐色	compound	++	+	+	+
5	17	女	7	右腹部	2年前	大豆大	黒褐色	compound	++	—	—	+
6	39	女	8	背部	不明	小豆大	黒褐色	compound	+	—	—	+
7	25	女	9	左第3指指背	1年前	小豆大	黒褐色	compound	+++	+++	+++	+
8	7	女	10	心窩部	1年前	大豆大	黒色	compound	+++	—	—	—
9	50	女	11	右大腿	子供の頃	卵黄大	黒褐色	compound	+	—	—	—
10	66	男	12	右膝臑	青年期	大豆大	黒褐色	compound	+	—	—	—
11	53	女	13	左大腿	不明	大豆大	黒褐色	compound	++	—	—	—
12	27	男	14	右上腹部	不明	大豆大	黒褐色	compound	++	—	—	+

図 2. 表皮突起の不規則な延長，真皮の炎症性細胞浸潤が顕著である。

図 3. 表皮真皮境界部の melanocyte の胞巣形成。乳頭層の fibroplasia

現病歴：いつごろからあったか不明だが，左乳房の小色素斑が，最近徐々に拡大してきたため来院

現 症：左乳房左下外側に，大豆大，扁平，赤褐色の小色素斑が1個みられた。他の部位にとくに目立つ色素斑はない（図1）。

組織像：表皮突起の不規則な延長がみられ，表皮真皮境界部には melanocyte の胞巣形成が顕著である。胞巣内の melanocyte は，紡錘形で，水平に走行している。乳頭層には，lamellarな結合織の fibroplasia も認められる。真皮上層には，帯状に，リンパ球を主体とする炎症性細胞浸潤が非常に顕著である（図2，3）。

図 4. 症例 7，左第3指指背の黒褐色斑

症例 7：25歳，女

既往歴：特記すべきことはない。

家既歴：家系内に悪性黒色腫の発症や，色素斑の多発する者はいない。

現病歴：約1年前，左第3指指背の黒色斑に気づいた。それ以前にはまったく何も認めなかった。次第に拡大してきたため来院

現 症：左第3指指背中央に小豆大，扁平，黒褐色，辺縁は不規則で周囲へ向かってわずかに褐色の浸み出しを伴う小色素斑が1個みられた。所属リンパ節は触知しない。他の部位に，いわゆるホクロで目立つものはなかった（図4）。

図 5. 境界部活性の強い母斑。腫瘍細胞内には melanin が非常に多い。

図 6. 表皮真皮境界部に, melanocyte の胞巣形成がみられる。

図 7.
真皮乳頭層の結合組織の fibroplasia

組織像：全体的には compound type の母斑細胞母斑の像を呈しているが、表皮真皮境界部には melanocyte の胞巣形成が著明である（図 5）。胞巣内細胞は紡錘形で、表皮と水平に走行し、異形成もみられる。胞体は明るく豊富で、微細な melanin 顆粒が多量に認められる。巨大 melanin 顆粒をもつものもある（図 6）。真皮の母斑細胞内には多量の melanin 顆粒が

みられる。真皮乳頭層には、結合組織が lamellar に走行する fibroplasia も明瞭である（図 7）。

考 察

Clark らが、多数の色素性母斑と悪性黒色腫の家族内発生例を報告して以来²⁾、この母斑は悪性黒色腫の前駆症状として注目されてきてい

る。このような家族例は familial type といわれる。一方、個体に多数の母斑があっても、家族内発生をみない場合は sporadic type といわれている。また、NIH consensus⁶⁾により、familial type を dysplastic nevus syndrome (DNS) とよび、sporadic type を dysplastic nevi (DN) とよんでいる。さらに、各個人に1～数個の母斑があるのみで、家族内発生はもちろんその個人に他の目立つ色素斑さえない症例の母斑を dysplastic nevus と称している。

DNS, DN, dysplastic nevus のいずれも、それらが悪性黒色腫の前駆症状となりうる可能性を秘めているといわれる性質上、その定義と診断が問題となる。臨床的にも、ときに悪性黒色腫が疑わしいような場合があり、治療的必要性をも考慮し、その臨床像のみで診断をつけうるか否かを試みた。われわれの検討した438個の母斑のなかで、Elder ら⁵⁾および NIH⁶⁾の dysplastic nevus の臨床像としての定義に相当するものは14個あった。しかし、組織学的所見もあわせて検討した場合は、4個が相当した。すでにいわれているように^{8)~11)}、dysplastic nevus の診断には組織所見が不可欠であり、臨床像のみでは、診断はつけ難かった。

Dysplastic nevus が将来悪性黒色腫に変化するかどうかは、いまだ解決されていない。DNS および DN では、多数の母斑の経過を注意深く観察することにより、その変化をみることができかもしれない。また、実際、悪性黒色腫の発生の報告もみられる^{1)~4)}。しかし、1～数個のみの dysplastic nevus の場合、その変化については、いまだ不明な点が多い。

438個の母斑群のうち4個、すなわち約1%の、通常の母斑細胞母斑より色調が濃く、特徴のある臨床像と、胞巣形成傾向が強く、炎症性細胞浸潤、fibroplasia などの特徴ある組織像を

もつ母斑に dysplastic nevus の名をつけることは、他の母斑細胞母斑と区別する意味において必要と考える。

文 献

- 1) Anderson, D.E., Smith, J.L. Jr. & McBride, C.M.: Hereditary aspects of malignant melanoma. J. Amer. Med. Assoc., 200: 741-746, 1967.
- 2) Clark, W.H. Jr., Reimer, R.R., Greene, M., Ainsworth, A.M. & Mastrangelo, M.J.: Origin of familial malignant melanomas from heritable melanocytic lesions. Arch. Dermatol., 114: 732-738, 1978.
- 3) Rahbari, H. & Mehregan, A.H.: Sporadic atypical mole syndrome. Arch. Dermatol., 117: 329-331, 1981.
- 4) Elder, D.E., Goldman, L.I., Goldman, S.C., Green, M.H. & Clark, W.H. Jr.: Dysplastic nevus syndrome. Cancer, 46: 1787-1794, 1980.
- 5) Elder, D.E., Kraemer, K.H., Green, M.H., Clark, W.H. Jr., & Guerry, D.P.: The dysplastic nevus syndrome. Amer. J. Dermatopathol., 4: 455-460, 1982.
- 6) National Institutes of Health consensus development conference summary, Vol. 4, No. 9, 1983.
- 7) 高橋 博之, 堀越 貴志, 神保 孝一: dysplastic nevus の臨床, 組織学的及び超微構造的特異性と悪性黒色腫との関連. 1. 臨床及び組織像. 日皮会誌, 94: 1537-1546, 1984.
- 8) 三原一郎: Dysplastic nevus, 皮膚臨床, 27: 841-849, 1985.
- 9) 長谷川正次, 川部美智子, 宇田川晃, 宇野明彦, 中林康青, 堀 嘉昭: Dysplastic nevus の1例. 皮膚臨床, 27: 851-854, 1985.
- 10) 斎田俊明, 川村美保子, 堀 嘉昭: Dysplastic nevus syndrome (Sporadic type), 皮膚臨床, 27: 855-860, 1985.
- 11) 中川秀己, 今門純久, 久木田淳: Dysplastic nevus の3例. 皮膚臨床, 27: 861-866, 1985.